

看護大学生の半年間にわたる臨地実習前後の社会的スキルの変化

石光美美子 古谷剛 林美奈子

(Fumiko ISHIMITSU Tsuyoshi FURUYA Minako HAYASHI)

【要約】

目的：本研究は看護学生にとって非日常の対人関係が最も長期間に及ぶ3年次の臨地実習前後の社会的スキルの変化を明らかにすることを目的とした。

方法：A大学看護学科3年生90名を対象に、菊池の社会的スキル測定尺度（KiSS-18）を用いて実習前後の社会的スキルを調査した。倫理的配慮は研究への参加は自由意志であり、参加を拒否した場合でも成績に影響しないこと、対象の匿名性の保持等を記載した趣意書を用いて口頭で説明し、調査票の提出をもって同意ありとみなした。

結果：回収された調査票のうち実習前後の対象者のコード番号が同一であった83名が分析対象となり（有効回答率92.2%）、KiSS-18の合計得点および下位尺度全ての得点が、実習前に比べ実習後で有意に上昇していた。さらに18項目の中で各項目の得点が実習後に有意に上昇したのは9項目であった。

考察：一定期間続く臨地実習の経験が社会的スキル得点を上昇させることが明らかになった。今後は実習前後の得点の変化が少なかった9項目についての育成方法を検討することが課題である。

キーワード：社会的スキル、臨地実習、看護学生

1. はじめに

近年、看護学生のコミュニケーション能力が低下し、臨床の場で必要とされる対人関係の構築までには相当の時間を要することが指摘されている。平成21年度から施行されている新カリキュラムでは、看護学生のコミュニケーション能力の育成が課題の一つとして挙げられた¹⁾。この結果を受け、看護基礎教育の場では、対人関係を円滑にするための技術である社会的スキルを含むコミュニケーション能力の育成が教育的な取り組みとして重視されてきた。

しかし新人看護師の早期離職が問題とされる社会背景の中、この早期離職が社会的スキルの程度と関係のあることが報告された。新妻ら²⁾によれば入職後3年以内の看護師を対象に「入職して1年以内に早期離職をした経験の有無」とそれに関連する社会性の関連を

検討したところ、社会的スキルの得点が低い者では早期離職経験者が多いという結果を報告している。すなわちこれは臨床現場で働く中で、一定レベルの社会的スキルを身につけていない、あるいは身につけることができなければ、離職する可能性が高まることを示しており、新人看護師の早期離職を防止する方策を検討するために有用な知見として注目に値するものである。

臨床看護師の社会的スキルについては、看護実践能力と関連があることが報告されている。高島ら³⁾によれば、新人看護師の社会的スキルは就労後6カ月までは低下するがその後上昇し、6カ月以降では社会的スキルと看護実践能力との関連が強くなること、および個人差が拡大することが指摘されている。また、増原ら⁴⁾は社会的スキルを構成する6因子の中で「ストレ

いしみつふみこ：看護学部看護学科

ふるやつよし：前目白大学看護学部看護学科

はやしみなこ：看護学部看護学科

ス処理のスキル」と「計画のスキル」の得点は、経年ごとに順次高まる傾向が認められたが、「初歩的スキル」や「高度のスキル」、「感情処理のスキル」、「攻撃処理のスキル」の得点は必ずしも経年的に変化しなかったことから、臨床看護師の社会的スキルは、個人の社会生活全般の影響を受けながら、さらに看護実践を通して獲得され発達していくものであると推察している。これはすなわち、一定レベルの社会的スキルを持つことができれば、新人看護師が臨床の場に適応でき、看護実践能力の育成に繋がることを示すものと考ええる。

一方で看護基礎教育においてもこの社会的スキルについては検討されてきた。野崎ら⁵⁾は、他学部と比較して看護学生は社会的スキルが高いことを報告し、同様に工藤ら⁶⁾も看護大学1年次生の段階で社会的スキルは高く、看護職を目指す学生はもともとこの種のスキルが高い集団である可能性があることを示唆している。一方、社会的スキルの育成方法については、授業⁷⁾や演習科目^{8,9)}の中で、あるいは実習^{10,11)}の中で検討されてきた。千葉らの報告⁷⁾では3年間にわたるProblem-based Learning（以下、PBL）を用いたテュートリアル教育は、社会的スキル尺度の得点を3年間で上昇させ、対人関係技能は発達したことを明らかにしている。また、田邊ら¹⁰⁾、出口ら¹¹⁾は精神看護学実習前後の対人関係能力を比較し、実習後に能力が向上することを報告している。特に臨地実習において学生は専門科目毎に異なる病棟で学習するために、その都度実習環境の場に適応し、実習目標の到達に必要な学習を行うこととなる。また様々な背景を持つ受け持ち患者や対象者、医療者と関わる経験をすることは、対人関係技能を育成する機会になることから、臨地実習では社会的スキルが育まれやすい学習環境であると考ええる。

しかしこれまでに報告された臨地実習における社会的スキルに関する報告では、専門科目毎の実習前後の変化を報告したものにとどまっており、また対人関係の構築が援助技術として重視される精神看護学実習後のスキル能力についての報告が多く、一定期間続く専門看護実習前後の社会的スキルの変化についてはほとんど報告されていない。千葉らの報告⁷⁾にあるように3年間にわたるPBLを用いたテュートリアル教育によって、社会的スキル尺度の得点が上昇したこと、さらに高島ら³⁾の報告でも新人看護師の社会的スキルが

入職後6カ月以降に上昇していることから、社会的スキル能力の育成は、一定期間のスパンで捉えることが必要であると考ええる。すなわち一定期間続く専門実習前後の社会的スキルの変化を捉えることができれば、社会的スキルが低くかつ変化が少ないスキルを知り、学生への効果的な支援方法を検討することができると考えた。そこで本研究は、看護学生にとって非日常の対人関係が最も長期間に及ぶ3年次生の臨地実習前と終了後の社会的スキルの変化を明らかにすることを目的とした。

2. 研究方法

1) 対象

A大学看護学部看護学科3年生90名とした。

2) 調査項目

社会的スキルは、菊池の作成した社会的スキル測定尺度（Kikuchi's Scale of Social Skill : KiSS-18）¹²⁾を用いた。この尺度は包括的な社会的スキルを身につけている程度を測定する尺度であり、6下位項目全18の質問項目から構成されている。6下位尺度は「初歩的なスキル」、「高度のスキル」、「感情処理のスキル」、「攻撃に代わるスキル」、「ストレスを処理するスキル」、「計画のスキル」から構成されており、各々の尺度が包含する内容は以下のとおりである。

「初歩的なスキル」

対人関係を円滑にするため相手の気持ちを讀んだり気持ちをおしはかって、挨拶や話し合いができるスキル。

「高度のスキル」

他人に上手に助けてもらったり、仕事の指示を与えたり、必要なときにはタイミングよく謝ったりするやや高度な対人関係のスキル。

「感情処理のスキル」

相手とのかかわりの中で、相手の気持ちを知ったり、自分の心の動きに注意が向いたりする、対人関係の円滑さを支えるスキル。

「攻撃に代わるスキル」

相手との付き合いの中で時には相手を攻撃したいという気持ちになったりするときに、対人関係を保っていくのに欠かせないスキル。

「ストレスを処理するスキル」

対人関係に伴うストレスによって相手との関係を悪

くしないためのスキル。

「計画のスキル」

相手と協力して仕事を進めるためには欠かせないスキル。

社会的スキル測定尺度 (KiSS-18) の信頼性と妥当性は確認¹²⁾されており、社会的スキルが優れている人は、あらゆる面で円滑な対人関係を持続、発展させることが容易であるとされている。この尺度を5段階評定 (いつもそうだ: 5点~いつもそうでない: 1点) で質問した。なお得点の範囲は18点から90点で、得点が高いほど社会的スキルが高いことを示している。

3) 調査時期

対象学生の臨地実習期間を図1に示す。対象学生の専門看護実習は3年次5月から7月までの前期と9月下旬から12月までの後期であり、実習は約半年間にわたる。そのため実習前調査を実習の直前5月とし、実習終了後調査を1月初旬に実施した。

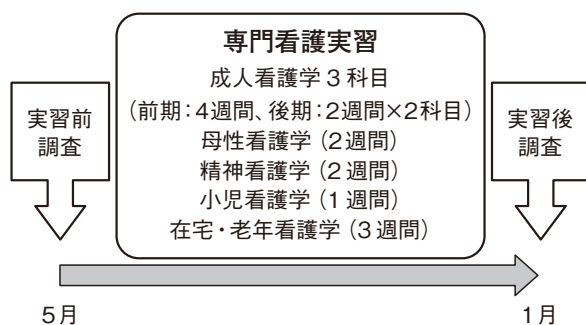


図1. 専門看護実習の実習概要

4) 調査方法

同一対象者における実習前後を比較するために、調査票には対象者が決めたコード番号を記入してもらった。また調査票の配布および回収は、集合調査でもって実施し、調査を実施した教室に一定時間回収箱を設置し調査票を回収した。

5) 倫理的配慮

研究目的と方法および研究への参加は自由意志であり、参加拒否の場合に実習評価に影響することはないこと、調査票には対象者のみが知るコード番号を記してもらうことで対象者の匿名性の保持を行うこと等を

記載した趣意書を用いて口頭で説明した。また調査票の提出をもって同意ありとみなした。

3. 結果

調査票を90名に配布し、回収された調査票のうち実習前後の調査票に記入されたコード番号が同一であったものを抽出した結果、83名が対象となった (有効回答率92.9%)。平均年齢20.9歳で男性8名、女性75名であった。

表1及び表2に実習前後の社会的スキル得点 (KiSS-18) の結果を示す。実習前後の社会的スキル得点であるKiSS-18の合計平均得点は、実習前が 55.9 ± 7.8 点に対し、実習後は 59.5 ± 8.4 点であり、有意に実習後の得点が高かった ($p=.00, t=-4.7$)。特にKiSS-18の各項目の平均得点が実習前に比べ実習後に有意に上昇した項目は、「初歩的なスキル」では「項目5: 知らない人とでも、すぐに会話が始められる」($p=.02$)の1項目、「高度のスキル」では「項目10: 他人が話しているところに、気軽に参加できる」($p=.00$)の1項目、「感情処理のスキル」では「項目13: 自分の感情や気持ちを、素直に表現できる」($p=.00$)の1項目、「攻撃に代わるスキル」では「項目3: 他人を助けることを、上手にやれる」($p=.00$)の1項目、「ストレス処理のスキル」では「項目14: あちこちから矛盾した話が伝わってきても、うまく処理できる」($p=.02$)、「項目17: まわりの人たちが自分とは違った考え方をもっている、うまくやっていける」($p=.02$)の2項目が、「計画のスキル」では項目番号9、12、18の3項目全てが有意に上昇した。

また表2のとおり下位尺度の比較では、「初歩的なスキル」は実習前が 9.6 ± 2.3 に対し、実習後が 10.0 ± 2.2 、「高度のスキル」は実習前 9.9 ± 1.7 に対し実習後 10.3 ± 1.9 、「感情処理のスキル」は実習前 9.1 ± 1.7 に対し実習後 9.6 ± 2.1 、「攻撃に代わるスキル」は実習前 9.2 ± 1.9 に対し実習後 9.6 ± 1.7 、「ストレス対処のスキル」は実習前 9.2 ± 2.1 に対し実習後 9.9 ± 1.9 、「計画のスキル」は実習前 9.0 ± 1.8 に対し実習後 10.1 ± 1.9 であり、全ての下位尺度で、実習後の得点有意に上昇した。

表1. 実習前と後の社会的スキル得点の比較

(N = 83)

下位尺度	項目 番号	18項目	実習前 平均得点		実習後 平均得点		p 値
初歩的なスキル	1	他人と話していて、あまり会話が途切れない方ですか	3.02	± 0.9	3.18	± 0.8	.12
	5	知らない人とでも、すぐに会話が始められますか	3.19	± 1.1	3.40	± 0.9	.02
	15	初対面の人に、自己紹介が上手にできますか	3.34	± 0.9	3.41	± 0.9	.45
高度のスキル	2	他人にやってもらいたいことを、うまく指示することができますか	3.02	± 0.8	3.14	± 0.9	.12
	10	他人が話しているところに、気軽に参加できますか	2.92	± 0.9	3.17	± 0.9	.00
	16	何か失敗したときに、すぐに謝ることができますか	4.00	± 0.7	3.98	± 0.8	.78
感情処理のスキル	4	相手が怒っているときに、うまくなだめることができますか	3.24	± 0.7	3.23	± 0.8	.89
	7	こわさや恐ろしさを感じたときに、それをうまく処理できますか	2.78	± 0.8	3.00	± 0.8	.06
	13	自分の感情や気持ちを、素直に表現できますか	3.04	± 1.0	3.40	± 1.0	.00
攻撃に代わる スキル	3	他人を助けることを、上手にやれますか	3.20	± 0.7	3.45	± 0.7	.00
	6	まわりの人たちとのあいだでトラブルが起きても、それを上手に処理できますか	3.04	± 0.8	3.10	± 0.8	.48
	8	気まずいことがあった相手と、上手に和解できますか	2.96	± 0.8	3.08	± 0.8	.30
ストレス処理の スキル	11	相手から非難されたときにも、それをうまく片付けることができますか	2.81	± 0.9	2.96	± 0.9	.18
	14	あちこちから矛盾した話が伝わってきても、うまく処理できますか	2.98	± 0.9	3.27	± 0.8	.02
	17	まわりの人たちが自分とは違った考え方をもっている、うまくやっていけますか	3.42	± 0.8	3.67	± 0.9	.02
計画のスキル	9	仕事（学習）をするときに、何をどうしたらよいか決められますか	3.18	± 0.7	3.49	± 0.8	.00
	12	仕事（学習する）の上で、どこに問題があるかすぐに見つけることができますか	2.95	± 0.8	3.30	± 0.8	.00
	18	仕事（学習）の目標を立てるのに、あまり困難を感じないほうですか	2.84	± 0.8	3.25	± 0.7	.00
社会的スキル合計得点			55.9	± 7.8	59.48	± 8.4	.00

表2. 実習前と後の社会的スキル6下位尺度得点の比較

(N = 83)

下位尺度	実習前 平均得点		実習後 平均得点		t 値	p 値
初歩的なスキル	9.6	± 2.3	10.0	± 2.2	- 2.2	.03
高度のスキル	9.9	± 1.7	10.3	± 1.9	- 2.3	.03
感情処理のスキル	9.1	± 1.7	9.6	± 2.1	- 3.0	.00
攻撃に代わるスキル	9.2	± 1.9	9.6	± 1.7	- 2.1	.00
ストレス処理のスキル	9.2	± 2.1	9.9	± 1.9	- 2.8	.01
計画のスキル	9.0	± 1.8	10.1	± 1.9	- 5.0	.0

4. 考察

本調査から一定期間続く臨地実習の経験が社会的スキル合計得点および下位尺度全ての社会的スキル得点を上昇させることが明らかになった。実習前の得点は 55.9 ± 7.8 であり、これは一般の大学生男子 56.40 ± 9.64 や大学生女子 58.35 ± 9.02 とほぼ同じ得点であった¹²⁾。しかし実習後の合計得点は 59.5 ± 8.4 点であり、これは千葉らの報告⁶⁾にある3年間PBLによるテュートリアル教育によって上昇した得点 58.91 点や、工藤ら⁶⁾の看護大学1年次生を対象にした調査で報告された得点 62.20 ± 9.2 点、藤野ら¹³⁾が看護大学4年生を対象に行った調査の得点 60.2 点とほぼ同じ点数まで上昇しており、一定期間続く臨地実習によって社会的スキルが育成された結果を意味するものである。

さらに本調査結果では6下位尺度全てにおいて実習後の得点が上昇しており、「計画のスキル」では最も得点の上昇が認められた。また、6下位尺度を構成する項目毎の実習前後の得点の平均値をみると、「ストレス処理のスキル」と「計画のスキル」を除く4下位尺度では、各々3項目中1項目のみが有意に得点が増加しているが、他2項目は実習前後で有意に変化をしていなかった。本調査では半年間にわたる臨地実習前後の変化を捉えており、社会的スキルの項目の中でも「ストレス処理のスキル」と「計画のスキル」項目は、臨地実習で経験するストレスへの対処方法を身につけたり、毎日行う行動計画の立案や実習の報告というように、日々繰り返し実施してきたことにより育まれた可能性が高い。一方で、「初歩的なスキル」や「高度のスキル」、「感情処理のスキル」、「攻撃に代わるスキル」の中で、実習前後に有意な変化を認めなかった項目については、項目の示す状況に遭遇しない限りスキルとして実施することはないために、半年にわたる臨地実習においてもスキル得点の変化が認められなかったのではないかと考える。以上の結果から、専門科目の内容に関わらず一定期間続く臨地実習後は、社会的スキル得点が増加していることが明らかになった。

看護基礎教育を経た新人看護師においては、一定レベルの社会的スキルを身につけていない、あるいは身につけることができなければ、離職する可能性が高まることが示されている²⁾。今後は一定期間続く臨地実習で社会的スキルの育成を強化するとともに、社会的スキルの変化が少ないスキルについて、どのように育成していくかを検討することが課題である。

5. 結論

看護学生を対象に半年にわたる専門看護実習前後の社会的スキル(KiSS-18)の変化を明らかにすることを目的とし、以下の結果を得た。

1. 社会的スキル合計得点は、実習前に比べ実習後で有意に上昇を示した。

2. 今後は社会的スキルを構成する18項目の中で、一定期間続く実習において得点の変化の少なかった9項目についての育成方法を検討することが課題である。

6. 謝辞

本調査にご協力頂きました学生の皆さまに感謝申し上げます。

【文献】

- 1) 小山真理子：新カリキュラムがめざすこと、看護教育 48, 555-562 (2007)
- 2) 新妻蘭子：病院経験の浅い看護師における早期離職と社会性の関連、東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科修士論文 (2008)
- 3) 高島尚美、樋之津淳子、小池秀子、箭野育子、鈴木君江、赤沢陽子：新人看護師12カ月までの看護実践能力と社会的スキルの修得過程—新人看護師の自己評価による—、日本看護学教育学会誌 13, 1-17 (2004)
- 4) 増原清子、内田宏美、榊井恵美子、津本優子、長田京子、長沢淑子、福岡美紀：臨床看護師の看護実践能力と社会的スキルの発達、島根大学医学部紀要 30, 51-57 (2007)
- 5) 野崎智恵子、千田睦美他：看護大学生の社会的スキル、第30回日本看護学会論文集 看護教育, 74-76 (1999)
- 6) 工藤千賀子、原田真里子、櫛引美代子：G大学看護学部における社会的スキルの実態、北日本看護学会誌 10, 45-51 (2007)
- 7) 千葉京子、川崎彰子、横森久美子、尾山とし子、森美智子：問題基盤型学習(PBL)を用いたテュートリアル教育—対人関係技能の発達に焦点をあてて—、日本赤十字武蔵野短期大学紀要 17, 7-11 (2004)
- 8) 山本美弥、榊原千佐子、石井成郎、須賀京子：看護学生の社会的スキル向上を目指すグループ学習の検討—授業デザインと教員の関わりに焦点をあてて—、日本看護医療学会雑誌 11, 17-25 (2009)
- 9) 大内隆、森田敏子：看護基礎教育カリキュラム開発 人形劇を用いた交流会ボランティアから学ぶ自発性と社会的スキルの獲得、日本看護科学学会学術集会講演集28回, 414 (2008)
- 10) 田邊要輔、藤田勇、渡辺敏博、山田洋子、親松善靖、石山正己、山本智美、佐藤久子、加藤真由美、丸山京子：精神看護学臨地実習前後における対人関係能力の比較、桐生大学紀要 20, 61-69 (2009)

- 11) 出口由美, 阿南あゆみ, 柴田弘子, 金山正子: 看護学生への自我態度と社会的スキルとの関連－本学4年生への調査より－. 産業医科大学雑誌 26, 153 (2004)
- 12) 堀洋道監修: 心理的測定尺度集Ⅱ. 170-173, サイエンス社 (2005)
- 13) 藤野ユリ子, 室屋和子, 佐藤一美: 看護系大学4年生の学生生活や対人関係に関する認識と社会的スキル. 産業医科大学雑誌 27, 266 (2005)

(2011年10月11日受付、2011年11月21日受理)